

臨床教育で外部人材と連携

5～6年次の卒業研究

京都薬科大

京都薬科大学は今年度から、5年次から6年次前期にかけて学生が医療従事者や企業等の外部人材と連携し、臨床系の卒業研究に取り組む「実践薬学コース」を本格的に開始した。質の高い基礎研究が京都薬大の強みだが、臨床系の研究を志向する学生に因應するため、その拡充に乗り出した。赤路健一学長は、「実務実習だけでは不足するような学生が興味を抱くもの、より深くアドバンスドな内容で学生自身が研究する。そういうコースにしたい」と語る。

京都薬大の学生は、3 年次後期から各研究室に配属されて研究を行う。

仕上げる。



赤路学長

期の「総合薬学研究A」を経て、5年次から6年次前期までの「総合薬学研究B」で卒業研究を

総合薬学研究Bは2コースに分かれ、従来通り研究室での研究に関わる「探求薬学コース」と、医療に関わる実践的な観点を取り入れて研究に取り組む「実践薬学コース」がある。

学生は所属する研究室の教員から指導を受けながら、医療従事者や企業関係者、他大学教員など外部の人材と連携して臨床系の研究に取り組むことが大きな特徴だ。

例えば、先端薬剤師ユニットでは、学生が病院でのチーム医療などに関わり、そこで活躍する薬剤師の活動に触れる。薬

剤師の活動に触れる。薬物治療や医療に関わる薬剤師を通じて学び得た内容や疑問を卒業研究にまとめる。

地域・在宅医療ユニットは、学生が地域の緩和ケアや看取りに関わる診療所や薬局等の活動に加わり、課題や解決法の研究を行う。

医療DXユニットは、医療現場のアプリやIoTなどの開発に取り組む企業関係者との対話を通じて、DX関連技術の活用や発展を研究する。

「これまで数年かけて実現可能性を検討し、今年度から本格的に開始した。改善点を克服しながら良いコースにしていきたい」と語る。

今後、臨床系教育や研究を拡充するために、外部人材との連携をさらに強化する考え。実践薬学コースに関わる学内の教員は十数人。基礎、臨床共に学内の教員数を増やす計画だ。

医療現場の様々な課題を解決できる薬剤師や、デジタルトランスフォーメーション、データサイエンスを活用できる薬剤

師らを輩出する体制の構築は、就職先の多様性確保にもつながると期待している。